

介護予防従事者の就業意欲を高める支援方法の検討

介護予防マネジメントコース

5007A307-9 小沼理士

研究指導教員： 岡浩一朗准教授

I 序論

わが国は他国の2倍以上のスピードで高齢化が進展しており、2020年には4人に1人が、2050年には3人に1人が65歳以上という超高齢社会になると言われている。このような中、2006年から介護予防を柱とした改正介護保険法が施行されている。いかにして高齢期の健康と生活機能を維持していくかが重要視されており、介護予防プログラムの開発および普及が急務となっている。

介護予防事業を効果的に実施していくためには、プログラムの中身だけでなく、実際に行う介護予防従事者のスキルにも注目する必要がある。どれだけ優れたプログラムであっても、伝える人のスキルが低ければ、それを適切に利用者に伝えることはできない。従事者がこのようなスキルを高めていくためには、介護予防事業への関心・意欲が高いことが重要と考えられる。近年、健康行動を増進させるために様々な行動科学の理論やモデルが用いられているが、Janis & Mannの意思決定バランスに注目することで、従事者の関心・意欲を高める介入方法が明確になるものと考えられる。意思決定バランスとは、人は自分にとってのメリットがデメリットを上回る場合に行動するという理論であり、運動や禁煙、減量などの様々な健康行動において測定尺度が開発されている。すなわち、従事者が介護予防事業の何にメリットやデメリットを知覚するかを明らかにすることで、メリットを強化してデメリットを減少させるといった具体的な介入方法に繋がるものと考えられる。しかしながら現在、介護予防事業に対する意思決定バランスの尺度は存在しない。

本研究の目的は、介護予防事業従事者の介護予防事業に対する関心・意欲を高めるための介入方法の手がかりを得ることである。具体的には、従事者が介護予防事業を実施する上で感じているメリットとデメリットを表す介護予防支援意思決定バランスの評価尺度を作成して、その信頼性を検証した。さらに、意思決定バランスに影響を及ぼすと考えられる要因との関係を検討した。

II 研究方法

介護予防事業に従事している131名に対して質問紙調査を実施した。先行研究の参照、ブレイン・ストーミングによる修正から、従事者が感じるメリットとデメリッ

トを評価する20項目を準備した。分析は、各項目の正規性を確認した後、最尤法バリマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量が0.4に満たない項目は除いた。内的整合性の信頼性についてはCronbachの α 係数を算出した。また、先行研究を参考にメリット因子からデメリット因子を引いた平均得点を介護予防支援意思決定バランス得点(以下、バランス得点)として算出した。バランス得点と介護予防支援セルフ・エフィカシー、介護予防事業の種類、介護予防事業に従事している理由、経験年数との関連性をt検定、一元配置分散分析、相関分析により検証した。なお、統計ソフトはSPSS 15.0Jを使用した。

III 結果と考察

探索的因子分析から、メリット因子8項目、デメリット因子5項目の2因子構造からなる介護予防支援意思決定バランスの評価尺度が作成された(表1)。説明率は全分散の29.2%であった。内的整合性の指標であるCronbachの α 係数は、メリット因子が0.78、デメリット因子が0.69と比較的高い信頼性を有することが確認された。また、バランス得点は介護予防支援セルフ・エフィカシーと有意な正の相関($r=0.32$ 、 $P<0.01$)が認められた。トランスセオレティカルモデルでは行動変容ステージが進むにつれて、バランス得点、セルフ・エフィカシーが高くなっていくことが知られている。よって、従事者の関心・意欲を高めるためには、バランス得点と同時にセルフ・エフィカシーを高める介入が効果的だと考えられる。バランス得点が高めるためにはメリットの知覚を強化してデメリットの知覚を減少していく介入を、介護予防支援セルフ・エフィカシーを高めるためには、現実的な目標を立てて成功体験を重ねられるような介入、介護予防に熟練した人の行動へ注意を向かせる介入、仲間同士で向上し合える環境への介入、本人が現状把握できる介入等を行うことが望ましい。介護予防事業の種類では、一般高齢者施策よりも特定高齢者施策において有意に高いバランス得点が認められた($P<0.05$)。介護予防事業は一次予防から三次予防まで連続的に、かつ総合的に行われることが推奨されており、そのためには特に一般高齢者施策の従事者への介入が重要と考えられる。性別、年齢、経験年数、介護予防に従事している理由とバランス得点の間には有意な関連性は認められなかった。

表1 介護予防支援意思決定バランスの評価尺度

		n = 120
メリット因子 (8項目)	($\alpha = 0.78$)	因子負荷量
仕事に充実感を感じる		0.76
仕事において自分が必要とされていると感じる		0.66
仕事を通じて自分が成長しているように感じる		0.63
仕事において自分のやりたいことができている		0.63
社会貢献をしているように感じて誇らしい		0.56
信頼できる仲間と一緒に仕事するのが楽しい		0.51
周囲から一目置かれていると感じる		0.43
利用者またはその家族から感謝されると嬉しい		0.43
デメリット因子 (5項目)	($\alpha = 0.69$)	
仕事について覚えることが多く負担を感じる		0.62
仕事に見合った報酬が得られない		0.59
仕事が多忙で家族や友人と過ごす時間が減る		0.53
利用者または家族との人間関係に悩むことがある		0.46
仕事によって疲れているように感じる		0.46

IV 結論

本研究から、従事者が介護予防事業の何にメリットを感じて何にデメリットを感じているか、また、どちらを強く感じているのかを把握できる介護予防支援意思決定バランスの評価尺度が作成された。決定バランスの評価尺度が作成された。意思決定バランスを用いることで、個々の状況に合わせた介入が可能となり、

従事者の就業意欲を高めて、介護予防事業が効果的に実施されていくための一助となるものと考えられる。本知見はその基礎資料として有用であると考えますが、今後は、従事者が介護予防事業を効果的に実践する行動変容ステージとバランス得点との関係、さらには意欲との関係を検討していくことが望まれる。